名曲「U Boj」のルーツと関西学院グリークラブ

輕部　潤

本稿は、二〇〇九年五月二六日の「関西学院史研究月例会」における、「名曲『U Boj』のルーツと関西学院グリークラブ」の講演に基づいて、記録としてまとめたものである。

まえがき

二〇〇九（平成二一）年は関西学院創立一二〇年、そして、我が国最古の男声合唱団として発足した関西学院グリークラブは創部一一〇年の記念すべき年を迎えた。その関西学院グリークラブには大正の頃から、これまで九〇年もの間、絶える事なく歌い続けている「U Boj（ウボイ）」と云う名曲がある。如何にも男声合唱曲らしいこの行進曲には勇壮な中にも秘められた悲壮感があって、歌う者、聴く者すべての心を捉えて放さない。

関西学院グリークラブの演奏会では、必ず、フィナーレを飾るこの曲を、一九一九（大正八）年九月から一〇月までのほぼ二ヶ月神戸に滞在したチェコ軍から偶然入手した塩路義孝（大正一一年卒、関学グリーOB）は、「U Boj」について、チェコ軍合唱隊から曲名を「前線へ」或いは「戦線へ」と教えられただけだったので、曲の由来や歌詞の意味を知りたいと、チェコ軍帰国後に英国大使館などを通じて調査を依頼したが、分からないまま年月が過ぎた。その後も多くの関西学院グリークラブOBや、そのファン、更に、他の大学合唱団までも巻き込んで、「U Boj」のルーツと、そのふるさとを探し求め続けるようになったのである。

疎開先の岡山の中学、高校で少しばかり合唱の味を占

め、関西学院グリークラブに入部して最初に叩き込まれたのが「空の翼」を始めとする校歌と、この「U Boj」だった。僅かの合唱知識の前に、この名曲は私に大きな感動を与え、生涯忘れ得ない曲となった。

卒業後、一〇年も過ぎてからであったが、何人もの先輩方がこれまで調べても分からなかった「U Boj」のルーツを引き継いで調べたいと、ふと思い付いた私は、多くの先輩や、友人たちの協力に支えられ、一九七九（昭和五四）年の関西学院グリークラブ八〇年を前にして、その全貌を解明する事が出来たのである。

先ず、チェコ軍が神戸に滞在した一九一九（大正八）年の九月から一〇月までの『朝日新聞』と『毎日新聞』の神戸版マイクロ・フィルムを調べたところ、チェコ軍は船の修理をする為に神戸に滞在したと分かり、修理するに至った原因を知りたいと、更に同年八月から九月までの『朝日新聞』と『毎日新聞』の九州版、門司版などを調べているうちに、チェコ軍はシベリアで戦っていたと分かり、その原点は第一次世界大戦が始まった事に遡ると判明した。

一発の銃声から第一次世界大戦へ

（一九一四・七・二八～一九一八・一一・一一）

一九一四（大正三）年六月二八日、欧州の火薬庫とも云われ、紛争の絶えないバルカン半島にある旧ユーゴスラヴィア中部、ボスニアの首都サライェヴォでオーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻が、その支配下にあって圧政に苦しむセルビアの学生の銃弾に倒れたのがきっかけとなり、七月二八日、オーストリア・ハンガリー帝国はセルビアに対して宣戦布告したが、これを契機に、ドイツ、オーストリア・ハンガリーの同盟軍と、英国、フランス、ロシアの三大陣営に日米両国を含む連合軍が参戦する第一次世界大戦が始まった。

チェコ軍シベリアを転戦

当時、チェコは、オーストリア・ハンガリー帝国に強制統合されていたので、開戦と同時に大軍の出動を指示され、欧州東部戦線でロシアを相手に戦闘をさせられたが、久しくオーストリアの圧政に苦しんでいたチェコ軍は、命を掛けてまで戦う意思は全くなく、次つぎと進んでロシア軍に投降し、逆に、祖国の独立を目指して、ドイツ、オーストリア軍と戦うようになった。

ところが、一九一七（大正六）年にロシアで革命が起こった。所謂、ロシア暦による二月革命でロマノフ王朝は崩壊し、臨時政府が成立した。更に、一〇月革命で臨時政府が倒れ、ソビエト政権が樹立した。翌一九一八（大正七）年にはソビエト政府は単独で、ドイツ、オーストリアとの講和に調印したので、ロシア国内にいる約六万名のチェコ軍の立場は極めて微妙なものとなった。ソビエト政府は高性能の武器や弾薬を充分に持っている強力なチェコ軍を恐れて、武装を解除しようとしたので、これに反発したチェコ軍は、本気でソビエト軍と戦うようになった。日米連合軍はチェコ軍に対して資金援助をして、ソビエト軍と戦いながらシベリアを東進するように指示した。ソビエトと講和したドイツは欧州東部の戦力を西部に回し、大攻勢に転じていたので、日米連合軍は強力なチェコ軍をウラジオストクから海路、欧州西部戦線に移動させて戦力増強を図ろうと考えた。日米連合軍は順次沿海州からシベリアに出兵し、ソビエト軍と戦いながら西進して、チタ付近で東進中のチェコ軍と合流して、日毎に勢力を増すソビエト軍との死闘が続いた。

一九一八（大正七）年一一月一一日、ドイツが連合国に降伏し、三千万名もの死傷者を出した第一次世界大戦はやっと終結したが、シベリアでの戦闘はその後も続き、連合軍は次第に優勢なソビエト軍に東へ東へと押し戻され、チェコ軍救出を果たしたものの、何の得るところもなく、順次、撤兵せざるを得なかった。この間にチェコ軍はシベリア鉄道をも制圧したと伝えられている。

チェコ軍の乗船が台風に遭遇

シベリアを転戦していたチェコ軍はウラジオストクに順次到着した。日米連合軍側が協議して、チャーター船で帰国させる事になった。第一船は南京号、第二船はアーチャー号で、両船ともに米国経由で帰国の途に着いた。第三船のヘフロン号（七、九〇六トン）は経路が異なり、インド洋経由で、ベネシュ少佐他将校一九名、下士官、兵士八二五名、米国軍医のS・T・ショート少佐他軍医一名と看護婦ミセス・ウエップ他五名、乗組員六四名の総勢九一七名が乗り込み、一九一九（大正八）年八月一三日にウラジオストクを出航した。

ところが、日本海を南下していたヘフロン号は、八月一五日の夜、折悪しく九州西部を襲った大台風雨に遭遇し、福岡県北方の響灘白鳥沖で仮停泊したが、風雨はますます激しくなり、これを避けようとして移動して、八月一六日

午前三時、下関西方の六連島大文字岩の暗礁に座礁した（遭難地点は六連島西北の藍島東方イガイ瀬、或いは藍島北方の大藻路岩との説もあるが明らかではない）。

ヘフロン号からの救助を求める無線を傍受した山口県豊浦郡角島無線所は下関水上警察署に連絡し、同署岡村所長は中川山口県知事を経て海軍に救助を求めた後、同署防長丸に乗船して、現場に急行した。一方、門司港務部も角島無線所からの連絡を受けて、日本海事会社門司支店に救助を依頼し、同社は大浦丸、魁丸、鞍馬丸の三隻を出動させた。海軍は加藤呉鎮守府長官が水雷艇四隻を呉より現場に急行させると共に、丁度、舞鶴より海軍連合艦隊が日本海を南下中だったので、山下連合艦隊長官に救助方を打信。第一艦隊の戦艦鹿島が現場に向かった。鹿島は八月一七日午前六時に現場に到着したが、先に到着していた日本海事会社の大浦丸他が調べたところ、ヘフロン号は船首を暗礁に乗り上げてはいたが、船底が二重底になっていて沈没の恐れがないと判断されたので、戦艦鹿島と水雷艇、防長丸は、救助を日本海事会社に任せて現場を引き上げた。

日本海事会社は、ヘフロン号破損箇所の応急修理を施し、満潮を待ってヘフロン号を曳航して離礁させ、八月二〇日朝、門司港外に到着した。この大暴風雨は九州一円に大きな被害を与え、又、多くの船舶が遭難した。海軍重油船の志自岐は種子島大崎沖で沈没し、乗組員一一六名の殆どが同船と運命を共にしたなど、悲しい記録が残っている中で、ヘフロン号が無事、救助された事は実に幸運だったと云えよう。

チェコ軍は門司から下関を経て神戸へ

門司に上陸したチェコ軍は門司市楠町（現・北九州市門司区老松町）の門司基督教青年会館（ＹＭＣＡ）に収容され、ヘフロン号は神戸三菱造船所のドッグで修理される事になり、八月二二日正午、門司港を出航して神戸に向かった。当時の『朝日新聞』は「珍客を迎えた門司」と云う見出しで、次のように報じている。

「……チェック軍八五〇名の将兵は同館に溢れ……異郷の空の一日の無聊を慰めるに彼らは余程苦心の色が見える。市街を隅から隅まで長い足で一息に回って来る。ルーブル紙幣では腹一杯食も出来ぬ始末。観念してセッセと衣類の洗濯をする者もあれば、付近の山に登って草木を蒐集して来る者もあるが、流石、音楽趣味の豊かな露西亜人（註・チェック人、スロバキア人は何れもスラブ系

の民族）だけあって、一つのセロ、一つのヴァイオリンを唯一の娯楽器として、次から次へと様々の音律が昨今の明け暮れ、同館の内外に流れている。……」（八月二四日『朝日新聞』九州版）

しかし、宿舎が狭過ぎた。門司や下関には適当な施設もなく、又、外国人の接待にも不慣れである。それにヘフロン号の修理には、一～二ヶ月はかかりそうだ。関係者が色々と協議した結果、チェコ軍を神戸に移す事になった。有吉忠一兵庫県知事は神戸市楠町の元県立神戸商業学校跡地（現・神戸大学医学部キャンパスの一部）の旧校舎を提供する事を決め、陸軍姫路師団より申し入れのあった大天幕や食器を借りる事にした。

九月三日朝、チェコ軍は陸軍輸送船で下関に送られ、下関駅を午後三時一〇分発の臨時列車に乗り、翌四日午前九時三三分神戸駅に到着した。アメリカ領事館ドウマン副領事、アメリカ人ウエスト氏、兵庫県川崎外事課長など大勢の関係者に出迎えられ、チェコ軍の大部分は楠町の元県立神戸商業学校跡の旧校舎に入り、一部は下山手通りの基督教青年会館（ＹＭＣＡ）と諏訪山の武徳殿に分宿。又、ベネシュ少佐など士官は居留地（海岸通六番）の神戸オリエンタル・ホテルに泊まる事になった。

元県立神戸商業学校跡に入ったチェコ軍は、旧校舎の教室の板の間にゴザを敷いて宿舎としたが、それでも入り切れず、校庭には大天幕が張られた。その模様を当時の『朝日新聞』は「神戸の第一夜」と題して次の様に伝えている。

「……六時頃、青年会館や武徳殿に分宿した者が列を組んでバラック（註・旧校舎）まで夕食に来る。テントの下でパンをかじり、暖かいスープを吸ううちにも賑やかな談笑は絶えない。食後、身体を水に洗ってホットした彼等は、港の方へ三々五々散歩に出る者、居残ってテント内でトランプに耽る者などある。中には胸をはだけて胡弓を弾きながら異国の夜のつれづれを慰める者あり、雑草の長いバラックの空き地に出て、夜の風に吹かれながら、故郷の民謡を唄う者もあり、賑やかな事である」（九月六日『朝日新聞』神戸版付録）。

関西学院グリークラブ部員・塩路義孝

通訳として活躍

こうしてチェコ軍の神戸滞在が始まったが、言葉が通じない。幸いチェコ軍の中に英語の話せる士官のチョーロッカー大尉がいた。これを知った兵庫県外事課の川崎課長は、ふと知人の塩路義孝を思い付いた。関西学院の学生であ

る。「あの人がいい」と彼は思った。「英語はうまいし。何よりも人柄がいい。任せればキットうまくやってくれるだろう」。うってつけの通訳である。早速、塩路に申し入れ、快諾を得た。

連日、塩路はチェコ軍宿舎を訪れた。彼らの軍服はボロボロで長い間シベリアを転戦した後を偲ばせ、旧校舎やテントで生活する有様は例えようもないくらい殺風景で味気ないものであった。が、彼らは何れも陽気な人たちばかりで、その上、祖国に帰れる日も近いとあって、その表情は底抜けに明るかった。

数日後、塩路は彼等がオーケストラや合唱の練習をしているところに出くわした。オーケストラの楽器を見ると、コントラバスはビールの木箱に電線の弦を張るなど、楽器と云うには程遠いものもあり、ブラスもへこんだり、傷がついたりで、中には、来日後に乏しい小遣いをはたいてやっと買った楽器もあった。又、その編成も決して満足なものとは云えなかった。祖国を出て以来五年間、この間、戦場を持ち歩き、傷だらけになった楽器であり、そして、メンバーの内、何人もが戦死し、負傷し、厳しい戦いを乗り越えた、それでも五〇名近いオーケストラを構成していた。

一方、チェコ軍合唱隊は約四〇名で、士官が指揮をしていた。その頃、関西学院グリークラブのメンバーは、約二五名であった事を思えば、当時として、それは大合唱団であったと云えよう。しかも、彼らはその立派な体格の上に、天性の音楽性と声質、声量を持ち、特に、バス・パートは全く素晴らしく、見事な男声四部合唱であった。塩路は感動した。そして、自分が関西学院グリークラブのメンバーである事を話し、互いに交流したいと持ち掛けた。

チェコ軍、関西学院へ

その後、関西学院当局の協力もあって、話は急速に具体化し、九月一五日、チェコ軍オーケストラと合唱隊を関西学院（当時は神戸原田の森、現・王子動物園）に招き、午後二時三〇分から音楽会を開く事が出来た。これをきっかけとして、数日後、グリークラブがチェコ軍宿舎を訪れて歌い、再び、チェコ軍が関西学院を訪問すると云った風に、数回の交流が続いた。時にはチェコ軍は関西学院の学生とフットボールや野球に打ち興じた事もあった。

チェコ軍は神戸市内でも一般公開音楽会を開いており、関西学院を含めて、彼らが神戸滞在中に演奏した曲目には、合奏、舞踊体操、合唱、詩の暗誦、体操、舞踏、活人画など多種多様に亘っていた。尚、プログラム（割愛）中に「舞

踊体操」或いは単に「体操」とあるが、これについて『関西学院グリークラブ史』（四〇年史）は「当時、既に音楽と体操との関係を実践的に示してくれた事は、識者の大いに感謝する処となった」と記している。

『関西学院グリークラブ史』（四〇年史）の記述によると「彼らの歌う『セルビアの戦いの歌』は実に勇壮なるものであった。声楽には羨ましい程の咽喉を持っていた。低音と来てはFの音の様な極く微かな弱い音でも、彼らの歌う時には、尚、その響が判然と打ち響く位である。そんな調子だから、合唱の時など高い調子になると、家の内では聞いて居れぬ程で、寧ろ秋の大空の下で聞いたらばと思う位である」と記され、又、「墺太利（オーストリア）統治下に永い間泣いた国民としての彼らのその歌う曲、奏する曲には凡て何処かに悲痛な人間苦を帯びているのであった。特に彼らが好んで歌うボヘミアソングや、短調ばかりのニュー・ボヘミアソング（一名「地獄へ行け！」）には彼らの一人一人の叫びが合唱になって相通じ、相抱いた悲痛の裡に生まれ出た事が良く分かるのである」とも記されている。そして、このようなチェコ音楽は、圧政下に苦しみ虐げられた民族の「漂白の魂」の表現と結んでいる。

名曲「U Boj」の譜面を我が手に

それ程に、チェコ軍の合唱隊はグリークラブ員の心を打った。どの歌も素晴らしい曲ばかりであった。「その内の二～三曲でもいい。我々も歌いたい。譜面が欲しい」と云う声が起こった。塩路は早速この事をチェコ軍合唱隊に話した。「欲しい曲はどれでも全部上げよう」と、即座に嬉しい返事が返って来た。兵士たちが差し出した譜面はどれもこれもボロボロになっていた。長い間戦場を持ち歩き、時にはポケットに折り畳んで入れてあった譜面は折り目が擦り切れ破れ掛けていた。塩路義孝は、その中から、最も印象の深かった「U Boj」など四曲を選んだ。

「貰って来たぞ！」 塩路が譜面を持ち帰るとグリークラブ部員の間から歓声が上がった。塩路は早速、擦り切れた譜面を判読しながらガリ版（謄写版）を切り、出来上がった譜面で練習が始まった。チェコ軍合唱隊の演奏を何度も聞いているので、数回の練習でものにする事が出来た。

やがて、ヘフロン号の修理も終わり、チェコ軍の帰国の日も近付いた或る夜、チェコ軍宿舎で関西学院グリークラブとの送別会が開かれた。グリークラブは覚えたばかりの「U Boj」「Ja Ne. To Ty」などを歌った。将兵たちは異国の学生たちが歌う「自分たちの歌」にじっと耳を傾けた。

歌い終わると、割れんばかりの拍手が起こった。どの将兵たちの目にも涙が浮かんでいた。

そして、一〇月二九日、チェコ軍はヘフロン号に乗り込み、翌三〇日午後四時、神戸港を出航し、独立を果たした懐かしい祖国へと旅立った。

こうして、チェコ軍と関西学院グリークラブとの交流は僅か二ヶ月足らずで終わったが、例え言葉は通じなくとも、音楽によって結ばれた友情は厚く、名曲「U Boj」とともに何時までも忘れ難い思い出となった。そして、以後、名曲「U Boj」は関西学院グリークラブの演奏会にとってはなくてはならない秘曲となったのである。

しかし、名曲「U Boj」の物語はこれで完結した訳ではない。と云うのは、その後「U Boj」は半世紀に亘って不思議な運命を辿るのである。先ず、当初はその曲名が「前線へ」或いは「戦線へ」と云う意味だと教えられただけで、歌詞の意味は勿論、曲の由来も分からなかった。この為、塩路義孝を始め多くの人たちが、歌詞の意味や曲の由来を知りたいと努力を重ねたが、全く分からないまま時が過ぎた。又、「U Boj」入手直後の音楽会では「セルビア戦歌」と記されていたのに、歌詞の意味も曲の由来が分からなかった為に何時の間にか「チェコ民謡」と記されるようになった。ところが、第二次世界大戦後の一九四九（昭和二四）年にグリークラブ部員の小林哲夫がプラハ在住のチェコ学生と文通を始め、たまたま「U Boj」について問い合わせたところ「チェコの歌ではない」と云う返事を受け取った。これまで、チェコの歌だと信じ切っていたグリークラブにとっては衝撃的な話であった。チェコの歌でなければ、一体何処の国の歌なのか。以後「U Boj」の国籍を求めてグリークラブＯＢたちの懸命の探索が始まった。

庄野英二（一九一五～一九九三、一九三六年関西学院専門部文学部卒、児童文学者、元帝塚山学院大学長）は音楽之友社発行の『音楽の窓』一九七二年二月号に「ウボイ覚え書」と題して「私は関西学院グリークラブのファンで、毎年冬に行われる定期演奏会も殆ど欠かさず聞いている。……プログラムは当然毎年変化するが、必ず聞くことが出来るのはウボイと云う曲である。これを歌ってくれない事には、私たちグリー・ファンにとっては承知出来ないので、歌い出してくれるまでは忍耐強く力任せの拍手を鳴らし続けるのであった。ウボイを聞けば、私のようなオールド・ファンであっても青春の血が逆流してくる。いても立って

も堪らない。私は星凍る夜空の下を駆け出したくなって来るほどだ。ウボイを聞いた夜ほど、切なくて泣きたくなる事はない。ああ、私は音痴でさえなければ、誰とでも肩組み合わせて夜通しでもこの青春の歌を歌いたい」、そして、庄野英二は「詳しい事を知りたくて目下調べにかかっている」と当時の『毎日新聞』や『神戸又新日報』の記事を引用してチェコ軍神戸滞在の様子を書き、最後に「日本のシベリア出兵は、寄席の落語家が、『シベリア失敗』と洒落を云った程の日本軍政の一大誤算であったが、偶然の結果、チェコ軍が神戸に立ち寄る事になり、そして、名曲『ウボイ』が関西学院グリークラブに伝えられた事は、人間の想像を遥かに超えた神様の尊いお計り事であると、私はその不思議な縁（えにし）に只ただ感嘆久しくするばかりである」と締め括っている。

「U Boj」はグリーにとって最も重要な曲

こうして手に入れた「U Boj」は関西学院グリークラブの演奏会には欠かせない重要な曲となったが、更に、プログラムには出さずとも、アンコールの最後に必ず歌われる曲となった。そして、一九三五（昭和一〇）年一一月二四日、東京日比谷公会堂で開催された第九回合唱競演会（現・全日本合唱コンクール）で佐久間太郎指揮の関西学院グリークラブは選択曲（現・自由曲）に「U Boj」を歌い、三連勝した事もあって、広く合唱ファンに知られるきっかけとなり、譜面は関西学院グリークラブにしかないので、他の男声合唱団にとっては垂涎の曲となった。

第一回世界大学合唱祭で「U Boj」のふるさと判明

一九六五（昭和四〇）年九月二〇日、米国ニューヨークのリンカーン・センターで開催された第一回世界大学合唱祭にアジア代表として参加していた関西学院グリークラブは、ヒルトン・ホテルでの昼食会で、南米の連中が歌って騒いだのに、負けてなるものかと「U Boj」を歌ったところ、ユーゴスラヴィアのマケドニア・スコピエ大学合唱団が唱和した事から、「U Boj」はユーゴスラヴィアでは有名な歌劇の中の曲だと分かったが、当時のユーゴスラヴィアは複合国家で、国の違うクロアティアで作曲された歌劇については良く知らなかったようで、詳しくは教えて貰えなかった。

関西学院グリークラブが帰国後に、世界大学合唱祭のジェイムス・ロバート・ビヨーギ監督に調査を依頼したところ、一九七二（昭和四七）年八月二〇日付で、彼の友人

でベオグラードの駐ユーゴスラヴィア米国大使館員が探してくれたと、歌劇ピアノ・スコアの「U Boj」部分が送られて来た。

一九七五（昭和五〇）年一一月二五日、新月会員渡部尚は東京出張中に、駐日ユーゴスラヴィア大使館を訪問し、サヴァ・クルシカパ文化担当官に「U Boj」譜面のコピーを見せて、英語で歌詞の説明を受け、始めて歌詞の内容が明らかになった。

一九七六（昭和五一）年七月一五日、再度、駐日ユーゴスラヴィア大使館を訪問した渡部尚は、たまたま前日にクルシパカ文化担当官が帰郷先のクロアティアから持ち帰った歌劇ＬＰレコード三枚組を借り、その解説文から、歌劇の作曲者や筋書きなどの全てが判明し、更に詳しく調べる為の弾みが付いた。更に渡部尚はクルシカパ文化担当官の後任ジェリコ・バラノヴィッチ参事官にも随分色々と教えて頂いた。（同年一一月四日に、歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」の初演より一〇〇年記念として、ザグレブの国立クロアティア劇場に於いて、同歌劇が上演された）。

歌劇のあらすじ

この歌劇は、一五六六年のシゲット城に於けるズリーンスキ四世の壮絶な戦死の史実に基づく物語を歌劇にしたクロアティアを代表する作曲家のイヴァン・pl.・ザイツの最も成功した作品で、一八七六年一一月四日にザグレブでザイツ自身の指揮により初演された。「U Boj」一曲だけはその一〇年前にウィーンで作曲され、初演されている。

オーストリア征服を目指したトルコ皇帝シュレイマン一世は、一五二九年にはウィーンの城壁まで迫ったが、堅固な城門と城壁は簡単には崩せず、目的を果たせないまま後退した。一五六六年に、再度、三万名の軍隊を率いて、先ず、ウィーン攻略ルートの要衝、クロアティアのシゲット城を落とさんと向かった。城には太守ズリーンスキ四世とその部下、家族ら四千名が守っていた。トルコ軍の攻撃を察知したズリーンスキは妻エヴァと娘イェレナら女たちに城から脱出するよう薦めていたが、彼女たちはそれを拒み、トルコ軍攻撃に備えて防備を固める将兵たちに混じって、甲斐甲斐しく働いていた。そしてズリーンスキとその部下たちは、最後まで戦って潔く死のうと誓い合っていた。

八月二〇日、トルコ軍はシゲット城前に到着して野営陣地を張った。シュレイマン皇帝はメフメット・パシャ・ソコロヴィッチ首相を使者として城へ送り、降伏するよう説得したが、ズリーンスキはこれを断固として撥ね付け、城

塞から首相らに向かって火を降り注いだ。流石のトルコ軍も、クロアティア軍の激しい抵抗と堅固な城塞に攻めあぐねて半月余り過ぎた。九月五日の早朝、シュレイマン皇帝が陣地で突然病死したので、士気の低下を恐れたソコロビッチは皇帝の死を隠し、城塞に対して猛攻撃を開始した。トルコ軍の攻撃は益々激しくなり、ズリーンスキと部下たちも必死の抵抗を試みたが、もはやこれまでと城門を開き、精鋭の部下たちを率いて敵中に向かって突撃して行った。シゲットの勇士たちは全員壮烈な戦死を遂げたが、これまでの時間稼ぎの間にウィーンからの援軍が到着し、半月余りの戦闘に疲れ、皇帝を失って戦意を喪失したトルコ軍を撃退してシゲットの街は守られた。歌劇ではこの最後の突撃の前に「U Boj」が歌われるが、毎年、一〇回以上も上演されるこの歌劇は必ず何時も満員で、「U Boj」を歌い出すと、客席は皆立ち上がって拍手が最後まで続けられる。

クロアティア留学生でヴァイオリニストのミルナ・ポトコヴァッツの協力

一九七八（昭和五三）年、TBSテレビの海外取材番組でクロアティア語の通訳をしていたクロアティアの首都ザグレブから、大阪外国語大学日本語学科に留学中のミルナ・ポトコヴァッツと話したいと、テレビ局勤務の新月会員に頼んで連絡先を調べて貰い、一二月六日、ミルナに会った。ところが、彼女は幸いにもザグレブ・フィルの元ヴァイオリニストだったと分かり、歌劇に関する資料収集を依頼して快諾を得た。一九七九（昭和五四）年四月一三日付、ビヨーギ監督より、林雄一郎新月会会長宛の手紙と歌劇に関する資料のコピーを入手。同年七月に同歌劇一〇〇年記念プログラムと、九月には同歌劇全曲のピアノ・スコアをミルナから入手。

一九八六（昭和六一）年、ウィーン楽友協会のアルベルト・モーザー総裁が築後一〇〇年を越えるホール修復費用の調達を求めて来日した時に、東京で今川安雄理事長（現・新月会会長）が紹介されて、ホール改修チャリティ・コンサートを関西学院グリークラブに要請された事から、グリークラブにOB新月会有志も同行する話になり、更に、ウィーンに行くなら、「U Boj」の故郷ザグレブまで足を伸ばそうとのスケジュールが決まった。早速、結婚してリエィカ在住のミルナに連絡して、ザグレブで里帰り演奏をするホールの確保と、もし、出来ればと思い、歌劇の上演予定を調べてくれるよう頼んだ。彼女は、わざわざ、一八〇km離れたザグレブに行き、ザグレブ音楽院ホールを予約し、彼女

がザグレブ音大生の頃から親しかった国立クロアティア劇場のヤンコ・キッフル監督を訪ねたところ、「歌劇の上演予定は決まっていないが、彼らのスケジュールに合わせて上演する」と約束してくれたとの連絡があった。

一九八九（平成元）年三月一六日、ウィーン楽友協会大ホールで、北村協一指揮による国立チェコ・ジリナ・チェンバー・オーケストラの伴奏による関西学院グリークラブ演奏会を好評の裡に終えてザグレブへ向かい、翌一七日、グリークラブとOB及びサポーターの一〇〇名は招待され、国立クロアティア劇場で我々の日程に合わせて特別上演された歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」を観劇し、一八日にはザイツがかつて校長を務めたザグレブ音楽院ホールでの演奏会で最後のアンコールに「U Boj」を歌い、文字通り里帰りを果たした。

名曲「U Boj」は全国の男声合唱団の愛唱歌に

「U Boj」の譜面は関西学院グリークラブの秘曲として外部へは渡していなかったのが、一九五二（昭和二七）年九月に開催された第一回東西四大学合唱演奏会（早稲田、慶応義塾、同志社、関西学院）以降は欲しいと頼まれると断り切れずに譜面を渡すようになった。

一九九二（平成四）年四月、関西学院グリークラブ、高等部グリークラブ、中学部グリークラブと新月会用に「U Boj」の決定版譜面を完成し、三五〇〇部を印刷し、東西四大学合唱団とそのOB合唱団をはじめ、希望する全国の合唱団に譜面を提供した。以来、「U Boj」は多くの男声合唱団にとっては同じ譜面の合同で歌える愛唱歌となった。

同年春、クロアティアのザグレブ・フィルハーモニーの日本公演を知り、梶本音楽事務所に「U Boj」のオーケストラとの共演を交渉し、大野和士指揮者へ「U Boj」の資料を送付してもらったところ、大野指揮者は全団員に相談し、賛同を得て共演が決まった。一一月一三日、大阪ザ・シンフォニーホールで開催された大野和士指揮のザグレブ・フィル演奏会で「U Boj」の共演には「U Boj」の譜面を入手した功労者の塩路義孝を招き、アンコール最初に関西学院グリークラブと新月会は始めてフル・オーケストラの伴奏で「U Boj」を歌い、満員の客席からの拍手は鳴り止まなかった。演奏会終了後にグリークラブと新月会メンバーは楽屋口でオーケストラ・メンバーを待ち構えたところ、誰からともなくオーケストラ・メンバーも含めた「U Boj」の大合唱となり、感激のひと時だった。

二〇〇〇（平成一二）年一〇月一日に関西学院グリーク

ラブ資料館が完成し、竣工式を迎えた。当日は長年の交流がある南ドイツ・ベッツィンゲンからフリッツ・コンスタンツァー村長、男声合唱団のエッケハルト・イェネ団長と通訳の松田トシ博士をお招きした。実は、一九九五年一月の阪神淡路大震災で亡くなったグリークラブ員があり、他にも怪我や家の倒壊など大きな被害もあったと知ったベッツィンゲン男声合唱団は毎年の家族旅行を中止し、その積立金と村費を合わせた義援金を贈られたもので、大切なものに使いたいと思い、これを基金として関西学院グリークラブ資料館が建築され、愛称を「ハウス・ベッツィンゲン」と命名した。

この関西学院グリークラブ資料館の開設以来、私はマスコミや合唱団など各方面からの問い合わせの窓口として対応し、訪問されるお客様にご案内している。特に「U Boj」に関する問い合わせが最も多く、その中でも「U Boj」について問い合わせのあった東京造形大学の越村勲教授とは数年来のメイルでのお付き合いをしていたが、たまたま、越村教授がかつてザグレブ大学に留学された事もあって、越村教授と親しいザグレブ大学歴史学科のドラゴ・ロクサンディチ教授の東京と札幌での講演が二〇〇七（平成一九）年九月末と一〇月初めに決まり、この機会にと、同年一〇月一日に関西学院へお二人で来院され、グリー・ホールとグリー資料館にご案内した。このお二人が東京へ戻り、駐日クロアティア大使館のドラゴ・シュタンブク大使と食事をされた時に、「U Boj」をクロアティアでは歌えなかった時代を含め、関西学院グリークラブは九〇年も歌い続けているとの話に感動された大使は、昨二〇〇八（平成二〇）年三月に初めて来院され、二度目の九月は関西学院グリー・フェスの最終ステージで「U Boj」を一緒に歌って頂いた。更に、大使のご好意で一一月には、世界遺産の古都にあるスプリット大学イヴァン・パヴィッチ学長とロコ・アンドリチェヴィッチ副学長を伴われて三度目の来院をされ、両大学学術研究交流の締結が決まった。この夏には、スプリット大学で開催される「サマースクール」に関西学院大学生も招待され、英国ケンブリッジ大学生、オクスフォード大学生らと共に受講する予定と聞いている。更に、本年四月に、シュタンブク大使のご紹介でザイツの生まれ故郷でもあるリエィカから、国立リエィカ大学のダニエル・ルカヴィナ総長が兵庫医大と関学へ来られる予定は事情があり延期となった。何れ改めて来院されると思われる。

終わりに

「U Boj」のルーツを知りたいとの考えから、多くの先輩や友人の多大な協力を得て、思い付いてから一〇年ばかりでその全貌の解明に至ったが、特に、調査を始めた当初から、お元気だった塩路義孝さんからはこの名曲「U Boj」の譜面を入手された当時の模様を神戸大丸店長室と御影のご自宅を度々訪問して貴重なお話しを伺い、更に、塩路義孝さんからは何度も電話や手紙を頂き、思い出された事をお知らせ頂いた。こちらからも判明した事項をその都度お知らせし、資料もお送りした。ザグレブ・フィルとの「U Boj」共演にもお招きして聴いて頂いたが、随分と喜ばれたのも幸いだった。又、私が関西学院グリークラブ一年部員の頃に四年で指揮者をされた浅野昭太郎さんは、朝日新聞社（カメラマンから後に大阪本社写真部長）におられたので、マイクロ・フィルムから当時の新聞記事を大量に探して頂いた。更に、関西学院グリークラブ一期下の渡部尚君が東京出張の忙しい中にも、度々駐日ユーゴスラヴィア大使館に立ち寄ってくれたので、「U Boj」のルーツ解明の突破口を開く事が出来た。この他にも多くの先輩方や友人から「U Boj」のルーツ調査に多大の協力を頂いた。紙面を借りて心からお礼を申し上げたい。この「U Boj」のご縁でこれまで全国に亙る多くの方々との交流が出来るとは夢にも思いも寄らず、更に、駐日クロアティア大使館のドラゴ・シュタンブク大使が三度も来院され、しかも大使のご紹介で関西学院大学とスプリット大学との学術研究交流に関する包括協定の締結調印（二〇〇八年一二月六日）もされて嬉しい限りである。

塩路義孝さんや浅野昭太郎さんを始めとする多くの先輩の方々には残念にも現世ではお目に掛かれなくなったが、もし来世お会い出来た時には「U Boj」のその後の素晴らしい展開を詳しくご報告したいと考えている。後、残れるは、クロアティアとの国境に近い南ハンガリーのシゲットヴァールでは「U Boj」の舞台となったシゲット城を含め、街を挙げてズリーニの命日（九月七日）に近い毎年九月の第一金曜日、土曜日、日曜日に開催される「ズリーニ記念祭」には是非とも関西学院グリークラブと新月会が合同で参加して「U Boj」の里帰り演奏をする事と、クロアティアから歌劇団を日本に招いて歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」の日本公演開催の日を待ち望んでいる。

【参考文献】
『関西学院グリークラブ部史』（四〇年史）　一九四〇年七月二五日発行、木下百太郎編、発行者　畑歡三
『関西学院グリークラブ八十年史』　一九八一年一月二五日発行、山中源也著、発行　関西学院グリークラブ部史発行委員会、発行委員長　浅野昭太郎
児島　襄『平和の失速・大正時代とシベリア出兵』　一九九五年発行、文藝春秋社
『第一次世界大戦』　一九八〇年発行、A・J・P・テイラー著、倉田稔訳、新評論
大江一道、山崎利雄共著『世界史への旅』　一九八一年発行、山川出版社
庄野英二「ウボイ覚え書」（『音楽の窓』　一九七二年発行、二月号より）、音楽之友社

他に、『朝日新聞』と『毎日新聞』の大正八年八月から一〇月までの九州版、門司版、神戸版など、複数のマイクロ・フィルムから当時の記事を転載させて頂いた。

〔追　記〕

尚、トルコ側の歴史資料も知りたいと、駐日トルコ大使館に問い合わせたところ、トルコ史研究家の大島直政先生を紹介され、大島先生から色々と教えて頂いた。「シュレイマン大帝が亡くなったのは一五六六年九月五日（九月七日説もある）早朝で、ニコラス・ズイリニ伯の率いたハプスブルク軍は約五千名、トルコ軍は約三万名とトルコ史書にあります。ズイリニ伯は六週間（実際には一九日間なので三週間の誤りと思われる）に亘って戦い続け、ついに戦死しました。最早、落城が決定的となり、少数の部下と共に城外へ出撃して華々しく戦死し、その最後は『天晴れな戦死』とトルコ軍側も賞賛したとの事です」と手紙で教えて下さった。駐日トルコ大使館からトルコ史研究家の大島先生をご紹介頂いた事も幸いだった。

U BOJ 年譜

2009.9.18　改訂
（輕部　潤　作成）

1566（永禄９）年８月20日～９月７日　シゲットの戦い（現・南ハンガリー・シゲットヴァール）。
トルコ皇帝シュレイマン一世（Sulejman Veliki 1494 ～ 1566）は大軍を率いてオーストリア・ウィーン攻略ルートにある要衝シゲット城を落とさんと、シゲット城太守ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ四世（Nikola Subić Zrinski 1508 ～ 1566）率いるクロアティア軍と対峙したが、堅固な要衝を攻めあぐねていた。しかし、９月５日早朝、トルコ陣地でシュレイマン皇帝が突然病死したのを自軍に隠して猛攻撃を掛けた。ズリーンスキ軍はもはやこれまでと城門を開いて、精鋭部隊を率いて突撃し、全員、壮烈な戦死を遂げた。しかし、この時間稼ぎの間にウィーンからの援軍が到着し、皇帝の死も知れ渡って戦意を喪失したトルコ軍を撃退してシゲットは守られた。（シュレイマン一世の死は９月７日とも伝えられる）

1812（文化９）年　ドイツ愛国詩人として知られるテオドール・ケルナー（Theodor Körner 1791 ～ 1813）は禁止されていた決闘を行った為にライプチヒ大学を追われ、ウィーンに移った後に劇作家として活躍し、「シゲット城の戦い」の史実を元に「ズリーニ」（マジャール語）を書いて成功し、宮廷劇場専属作者となる。1813年、故国に戻り、ドイツ開放リュッツオー義勇兵団に投じてナポレオン軍との戦闘中にも詩を作り続けて戦死した。翌1814年に彼が残した詩集「琴と剣」が刊行された。1970年に東ドイツはその栄誉を称えてテオドール・ケルナー賞メダルを制定している。

1866（慶応２）年７月７日　クロアティアの作曲家イヴァン・pl. ザイツ（Ivan pl. Zajc 1832 ～ 1914）はウィーンで男声合唱曲「U Boj」を作曲して初演。作詞はフラーニョ・マルコヴィッチ（Franjo pl. Marković 1845 ～ 1914）。1982（昭和57）年イヴァン・ザイツ生誕150年。この「U Boj」は第１稿、第２稿、第３稿までは男声合唱として編曲されたが、第４稿は歌劇用に混声合唱（一部は独唱）に編曲され、歌詞も一部変えられている。

1867（慶応３）年１月14日　ザグレブで「U Boj」初演。

1876（明治９）年11月４日　ザグレブで作曲者ザイツ自身の指揮による歌劇 「ニコ

ラ・シュービッチ・ズリーンスキ」初演。テオドール・ケルナー原作。「U Boj」を除く台本作詞はフーゴ・バダリッチ（Hugo Badalić 1851 ～ 1900）、作曲はザイツがザグレブで1874（明治７）年４月29日脱稿。

1914（大正３）年６月28日　サライェヴォ事件が発生し、第一次世界大戦［同年７月28日～ 1918（大正７）年11月11日］勃発の原因となった。

1919（大正８）年　日米連合軍がシベリア戦線よりチェコ軍を救出し、ウラジオストクから米国船で順次帰国させた。第３船ヘフロン号はチェコ軍将兵845名を乗せて出航し、日本海から南下中に台風と遭遇。８月15日、下関西方で座礁した。船を神戸三菱造船所で修理する間にチェコ軍も９月４日から神戸に滞在した。兵庫県川崎外事課長の依頼で関学グリー部員塩路義孝はチェコ軍英語通訳を務め、９月15日、神戸原田の森（現・王子動物園）の旧関西学院でチェコ軍演奏会開催などチェコ軍合唱隊との交流を通じて名曲「U Boj」を含め４曲の譜面を入手。10月29日、チェコ軍は修理を終えたヘフロン号に乗船し、10月30日、独立を果たした祖国へ向い出航。以来、名曲「U Boj」は関学グリーの演奏会で必ず歌われる曲となった。

1935（昭和10）年11月24日　東京日比谷公会堂での第九回合唱競演会（現・全日本合唱コンクール）で関学グリーは選択曲に「U Boj」を歌って３年連続優勝した事から、名曲「U Boj」が全国の合唱団や合唱ファンに知られるきっかけとなった。

1939（昭和14）年～ 1945（昭和20）年　第二次世界大戦。

1949（昭和24）年「U Boj」はユーゴスラヴィアの歌ではないか（関学グリー部員小林哲夫宛のチェコ・ペンフレンドからの手紙に書かれてあった内容）。

1965（昭和40）年９月20日　関学グリーは第一回世界大学合唱祭に参加。ニューヨーク･ヒルトンホテルでの昼食会で関学グリーが歌った「U Boj」にユーゴスラヴィア代表のスコピエ大学合唱団が唱和した事から、ユーゴスラヴィアでは有名な歌劇中の歌とは判明したが、当時、ユーゴスラヴィアは複合国家で、クロアティアとは国の違うマケドニア・スコピエ大学合唱団は歌劇の内容については知らなかったらしく、詳しくは教えて貰えなかった。

1972（昭和47）年８月10日付、ニューヨークの世界大学合唱祭のビヨーギ監督（James Robert Bjorge 1925 ～ 2004）に「U Boj」の調査を新月会杉田鑄一郎理事長から依頼していたところ、ビヨーギ監督の友人で駐ベオグラード米国大使館員が見付けてくれたと歌劇ピアノ・スコアの終曲「U Boj」部分コピーが送られて来た。

1975（昭和50）年11月25日　新月会員輕部潤の依頼で同会員渡部尚は駐日ユーゴスラヴィア大使館を訪問し、クルシカパ文化担当官に「U Boj」譜面コピーを見せ、

歌詞の説明を受ける。

1976（昭和51）年７月15日　渡部尚は帰郷先のユーゴスラヴィアからクルシカパ担当官が持ち帰った歌劇ＬＰレコード３枚組を借り、その解説文から歌劇筋書きのすべてが判明。同年11月４日、歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」初演より100年記念の歌劇上演。

1978（昭和53）年12月６日　輕部潤はクロアティア・ザグレブからの大阪外国語大学日本語学科留学生でヴァイオリニストのミルナ・ポトコヴァッツと会い歌劇に関する資料収集を依頼。

1979（昭和54）年４月13日付、ビヨーギ監督より、林雄一郎新月会長宛の手紙と歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」に関する資料のコピーを入手。７月に同歌劇100年記念プログラムと９月には同歌劇全曲のピアノ・スコアをミルナから入手。

1989（平成元）年２月25日　ザグレブ・国立クロアティア劇場のヤンコ・キッフル監督から歌劇特別上演開催の電報入手。２月26日、関学グリー90年記念リサイタル。３月16日、ウィーン楽友協会大ホールで国立チェコ・ジリナ・チェンバー・オーケストラ伴奏による関学グリー演奏会を開催（新月会有志同行）。翌３月17日、ザグレブ・クロアティア国立劇場で我々の日程に合わせて特別上演された歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」を観劇。翌３月18日、ザイツがかつて校長を務めたクロアティア音楽学院ホールで関学グリー演奏会を開催。アンコールに「U Boj」を歌い、文字通りの里帰りを果した。11月24日、ベオグラードのユーゴスラヴィア作曲家連盟より、ザイツ生誕150年記念（1982年）ザイツ合唱曲集500冊限定出版された内の２冊の寄贈を受けた。

1992（平成４）年４月　関学グリーと新月会用に発音記号と単語の逐語訳付きの「U Boj」決定版　譜面を完成。この譜面を3,500部印刷し、希望する全国合唱団に配布した。11月13日、大阪ザ・シンフォニーホールで開催された大野和士指揮のザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団演奏会のアンコールにオーケストラ伴奏で関学グリーと新月会合同による「U Boj」共演を果した。

1996（平成８）年９月14日　「U Boj」のルーツを自力で解明された関西学院中学部グリーＯＢの古賀義雄（昭和12年旧制中学部卒、昭和14年大学予科卒、昭和16年大学法文法卒）はハンガリー団体旅行中にブダペシュトから単身で南ハンガリーのシゲットヴァールを訪ねて、シゲット城を見学した。「日本からＵ Boj のふるさとを訪ねて来た」と云うと係員は吃驚して、早速「U Boj」のテープを流してくれる中で城内を見学したが、古賀義雄の訪問が、もう１週間早ければ、丁度「ズ

リーニ記念祭」だったのにと残念でならない。

○ シゲット城は現在クロアティアとの国境に近い南ハンガリーのシゲットヴァールで戦争記念博物館として残され、当時の武具などが城内に展示されている。ズリーニ四世はハンガリーの英雄と称えられ、彼の命日（９月７日）に近い毎年９月第一週の金・土・日曜日はシゲットヴァールでは街を挙げて「ズリーニ記念祭」を開催している。一方、クロアティアでもズリーンスキは救国の英雄と称えられ、ザグレブのクロアティア国立劇場で毎年 10 回余り上演される歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキ」は必ず満員の盛況と聞いている。

○ 17 世紀にハンガリーの政治家で詩人の伯爵ズリーニ七世は曽祖父ズリーニ四世を称える一大叙事詩をマジャール語で書いているが、現在では絶版となり、ブタペシュトのセーチェーニ図書館などに保存されている。2007（平成 19）年２月、この一大叙事詩のクロアティア語版をザグレブで見付けられた東京造形大学越村勲教授からそのコピーを頂いた。

○ シゲットヴァール（Szigetvár）は古くからの地名ズリーニヴァール（Zrinyivár）とも呼ばれている。ハンガリーでは日本や中国などと同じく苗字を先に表記するので「ニコラス・ズリーニ」は「Zrinyi Nikolas」となる。（vár はマジャール語で城）

○ クロアティアを代表する作曲家イヴァン・pl.・ザイツが生まれたアドリア海最大の港湾都市リエィカでは、彼の栄誉を称えて歌劇場は国立クロアティア劇場「イヴァン・ザイツ」と名付けられている。

○ 2009（平成 21）年９月４日～６日に開催された「ズリーニ記念祭」を見たいと、新月会員でニューヨーク在住の門田好正（昭和 39 年関学大経卒）は典子夫人とシゲットヴァールを訪問し、シゲットヴァール生まれの、フィンランドで音楽の先生を勤め、市長の片腕として記念祭の世話をしているエーヴァ・パンドゥルさんに会い、彼女からパイジ・ヨージェフ市長を紹介され、市長から友好の印として、「ズリーニ記念メダル」を頂き、300 名ほどのレセプションに誘われ、壇上で市長から「日本から来た合唱団の方だ」と紹介され、関西学院グリークラブ或いは新月会で来年９月３日～５日に開催される「ズリーニ記念祭」に参加して「U Boj」を歌って欲しいと云われ、更に、エーヴァさんから「宿泊はこのホテルが良い」と案内された上に、来年にはブダペシュト空港へ迎えに行くとまで云われたと、「ズリーニ記念祭」参加に前向きの検討を頼まれている。（敬称略）

（註）文中の「U Boj」作曲者「イヴァン・pl.・ザイツ」の「pl.」は「plemenitaš」（plemenit）貴族を表わす正式名称で、ドイツなどの氏名の間に入れる von と同様。